

# 日本人によるイギリスでのシェイクスピア劇の上演とその受容

田村 真弓

## I 序論

日本で初めてシェイクスピア劇が上演されたのは、1866年、横浜の在留外国人による Lecture Entertainment 中の『ハムレット』と『夏の夜の夢』からの抜粋であった。次いで、日本で初めて日本人によってシェイクスピア劇が上演されたのは、1885年、大阪の戎座で、中村宗十郎一座による『ヴェニスの商人』の翻案歌舞伎、『何桜彼桜銭世中』であった。その後、第二次世界大戦による中断を除いて、日本のシェイクスピア劇の上演は途絶えることなく続き、1985年以降は、シェイクスピア演劇の本場であるイギリスで日本人によってシェイクスピア劇が上演されることも、もはや当たり前になった。

本発表は、1985年以降の日本人のイギリスでのシェイクスピア上演を、イギリスで発表された劇評を中心に分析し、イギリス人が日本のシェイクスピア劇に求めるもの、すなわち、イギリス人にとっての「日本の/日本人によるシェイクスピア」(Japanese Shakespeare)とは何か、を明らかにすることを目的とした。

## II イギリスでの上演に向けて

イギリスでの日本のシェイクスピア劇の上演の先駆けとなったのが、1985年のエディンバラ・フェスティバルにおける蜷川幸雄演出の『NINAGAWA マクベス』であったことは、周知の事実である。その蜷川に影響を与えたのは、1970年に始まるロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの来日公演であった。1970年には、テリー・ハンズ演出の『ウインザーの陽気な女房たち』とトレバー・ナン演出の『冬物語』、1972年には、ジョン・バートン演出の『オセロー』、『十二夜』、『ヘンリー五世』が、日生劇場で上演されたが、中でも、蜷川を始めとする日本の演劇人に多大な影響を与えたのは、1973年のピーター・ブルック演出の『夏の夜の夢』であった。“a white, empty space”で演じられた、この『夏の夜の夢』を観た蜷川は、自由に、現代劇としてシェイクスピア劇を上演できる可能性に気づいたと言う。

これを受けて、1974年、蜷川は市川染五郎（現、松本白鸚）と中野良子主演の『ロミオとジュリエット』を、庶民の視点を生かした猥雑で実験主義的な手法で演出した。この後、出口典雄のシェイクスピアシアター、木村光一の文学座、安西徹雄の演劇集団円などによるシェイクスピア劇の上演が相次ぎ、日本でシェイクスピア・ブームが巻き起こった。

次に日本のシェイクスピア上演史にとってエポック・メイキングになったのは、1988年、シェイクスピア時代のグローブ座を模して作られた東京グローブ座の開場と、1991年、第5回世界シェイクスピア大会の東京開催であった。この時、世界のシェイクスピア学者が東京に集結し、「日本のシェイクスピア」の存在が世界に認知される契機となった一方、東京グローブ座を舞台に、ピーター・ホールやケネス・ブラナーといった錚々たる演出家の率いるイギリスの劇団の来日公演が急増し、日本人が本場のシェイクスピア劇に直に触れることが可能になった。

さらに、1991年には、イギリスでジャパン・フェスティバルが開催され、織田紘二演出、市川染五郎（現、松本幸四郎）主演、仮名垣魯文の歌舞伎版『ハムレット』である『葉武列土倭錦絵』、『ウインザーの陽気な女房たち』を狂言に翻案した野村万作と野村萬斎の『法螺侍』、劇団万有引力の実験音楽劇『リア王』と、三者三様の日本のシェイクスピア劇が招聘上演された。

こうして、1980年代後半、イギリスと日本の中でシェイクスピア劇を通じた交流がなかったほどに盛んに行われ、「日本のシェイクスピア」がイギリスの演劇界に受け入れられる下地が出来上がったのである。

## III イギリスでの上演

まず、イギリス上演の先陣を切ったのは、蜷川幸雄であった。仏壇の中で演じられる劇中劇という形を取った『NINAGAWA マクベス』は、圧倒的な評価を受け、「一夜にしてレジェンド」(*Independent* 19 May 2015)になった。蜷川は、実家で仏壇に線香をあげていた時に、このアイデアを思いつき、これにより日本人がシェイクスピアをやる意味を見出したと言う。1987年、蜷川はイギリスのナショナルシアターが主催した「国際演劇祭87」で、『マクベス』と『王女メディア』を再演し、「日本のシェイクスピア」の第一人者として、確固たる地位を築いた。

その後、蜷川は1999年にイギリス人俳優を起用して英語の『リア王』、2004年に英語の『ハムレット』を上演したが、英語を話せないという理由からか、イギリス人俳優を十分に演出することができず、イギリスの観客から「蜷川が提供したものは失望だ」(*British Theatre Guide, Nottingham* 2004)との酷評を受けた。これにより、蜷川本人も、台詞を聞くヨーロッパ演劇と、舞台を見る日本の演劇の違いを感じ、「二度とイギリスの俳優を演出し

ないと決意した」(*Financial Times* 18 April 2007)と述べた。

その後、蜷川は日本人俳優の演出に専念し、2003年の『ペリクリーズ』、2006年の『タイタス・アンドロニカス』、2007年の『コリオレイナス』、2012年の『シンペリン』を、日本の伝統芸能を使って上演し、イギリスの観客から高い評価を得た。

2015年には、自身8度目の演出となる『ハムレット』をロンドンで上演した。この作品は、初めて日本にシェイクスピアが紹介された明治時代、長屋に住む庶民の前で『ハムレット』の最終リハーサルが上演されるという設定であった。これにより、蜷川は、「アジアの、日本人である我々がイギリスで『ハムレット』を上演するとはどういうことなのか」という疑問に答えを出そうとしたのである。

2017年には、ロンドンとプリマスで『NINAGAWA マクベス』が再々演された。その目的は、人生の晩年を迎えた蜷川が「本当に自分が世界性を持った作品が創れていたのか、圧倒的だったのか」を確認するためであったが、その答えは、「イギリスでの初演から30年経っても、蜷川の『マクベス』はイギリスのシェイクスピアを大いに顔色なからしめる」(*Guardian* 26 September 2017)という劇評に表現されている。

蜷川演出の「歌舞伎シェイクスピア」として、満を持して登場したのは、2009年の『NINAGAWA 十二夜』であった。しかし、リアリズム演劇に慣れたイギリスの観客には、歌舞伎の様式性が受け入れがたく、その劇評は必ずしも肯定的なものばかりではなかった。『歌舞伎ハムレット』同様、一人二役の早替わりと女形が注目を集めたものの、手厳しい劇評が続いた。結局、イギリスの観客は翻案された「歌舞伎シェイクスピア」を、自分たちのシェイクスピアとはかけ離れたものとして捉えたようである。

歌舞伎版に先立って、狂言化されたシェイクスピア劇『法螺侍』と『まちがいの狂言』がイギリスで上演されたが、数日間の日本関連のイベントとしての扱いであった。また、2003年、狂言役者、野村萬斎が演じた『ハムレット』は、イギリス人のジョナサン・ケントによる演出であったが、蜷川同様、着物や鮮やかな色彩といった日本的な視覚性を存分に利用していた。主役の野村萬斎は、ある劇評家によって酷評されたが、オールメールの配役は注目を集め、女形によるガートルードとオフィーリアは絶賛された。

以上、歌舞伎と狂言のシェイクスピア作品のイギリスでの受容に関して言えば、イギリス人にとって、シェイクスピアのテキストを日本語で上演することは許容範囲であるが、歌舞伎版、狂言版となり、英語字幕がシェイクスピアのテキストから離れると、もはや「我らのシェイクスピアではない」と感じるようである。

2016年の蜷川幸雄の没後、「日本のシェイクスピア」を担うことになったのは、野田秀樹である。2022年、ロックバンド「クイーン」にオマージュを捧げ、源平合戦をモチーフに翻案された『ロミオとジュリエット』、『Q: A Night at The Kabuki』がロンドンで上演された。タイトルに“Kabuki”とあることから、イギリスの劇評家たちは、しばしばこの作品と「歌舞伎」との比較を試みたが、その言及はあくまで表面的なものであった。

以上のように、『NINAGAWA マクベス』から野田秀樹の『Q』まで、日本の演劇人たちは40年近くにわたり「日本のシェイクスピア」をイギリスで発信し続けてきたのである。

#### IV 結論

最後に、イギリスでの「日本のシェイクスピア」の受容を総括し、今後の展望について考察したい。今まで見てきたイギリスでの劇評において、必ずといってよいほど言及されていたのが、日本文化の使用と視覚性、様式性である。とりわけ、蜷川幸雄の舞台では、桜、侍、仏壇、ひな壇、石庭、禊といった日本文化が提示され、歌舞伎、能、狂言、文楽などの日本の伝統芸能に基づく、衣装、化粧、女形、和楽器、黒子といった様式が使用された。これらは、視覚性や様式性と結びつき「日本のシェイクスピア」の特徴を成すものと捉えられるようになったと考えられる。しかし、イギリスの観客および劇評家が、このようにして成立した「日本のシェイクスピア」を深く理解し、鑑賞しているかという点、必ずしもそうではなく、「劇は絶えず感心させるが、めったに感動させない」(*Financial Times* 25 May 2015)という感想に尽きるのである。

それでは、「日本のシェイクスピア」のイギリス上演が無意味だったかと言うと、決してそのようなことはない。なぜなら、「日本のシェイクスピア」は「イギリスのシェイクスピア」(British Shakespeare)に、確かに影響を与えているのである。例を挙げると、2004年、ストラットフォード・アポン・エイボンのアザー・プレイス劇場で、文楽人形に影響を受けたパペットの舞台 *Venus and Adonis* が上演された。また、シェイクスピア俳優であり、演出家のケネス・ブラナー監督による映画 *As You Like It* (2006) は、19世紀の日本を舞台に、侍、相撲、忍者、芸者を取り入れた。さらに、2010年に改装されたストラットフォード・アポン・エイボンのロイヤル・シェイクスピア・シアターには、歌舞伎の花道にインスパイアされた舞台に続く通路が設置された。そして、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー制作によるジブリのアニメを原作とする *My Neighbour Totoro* (2022) が、ロンドンのバービカン・シアターで好評を博したことは記憶に新しい。

こうして、シェイクスピア劇を通じた日英の文化交流は、長い歴史を経て未来へと続くのである。